

日本思想史学の現在と未来

高橋 文博

二〇一八年に、日本思想史学会が創立五〇年を迎えるにあたり、大会委員会は、大会シンポジウムを、二〇一七年度大会と二〇一八年度大会とをセットとして企画することとした。大会委員会における企画の基本的な姿勢は、日本思想史学が、国際的視点のもとに、現代社会へのメッセージ性をもつべきであるということであった。

二〇一七年度の第一回シンポジウムは、日本思想史研究においてホットな関心が集まりつつあると思われるテーマを設定した。第二回の二〇一八年度大会では、大きく趣向を変えている。国際的視点のもとで、現代社会へのメッセージ性をもちたいという基本的な姿勢は同じであるが、学会の大きな節目にあたり、日本思想史学を歴史的にとらえ返すべく、「日本思想史学の現在と未来」とした。

具体的には、日本思想の展開・転回の様相を、古代から中世へ、中世から近世へ、近世から近代へという三つの時期を対象として、報告者自身の研究にもとづいて、思想の動態を総括するという企画を立てたのである。この場合、問題となるのは、時代区分であるが、それは報告者に委ねることとした。

この場では、通常、シンポジウムのテーマ設定について、企画側のメッセージや立ち入った説明がなされる

ことになっている。このたびは、そうっていない。大会委員会が知恵を絞ったのは、シンポジウムの基本的な姿勢と大きな枠組みを確認した上で、報告、特定質問、司会の方々を選定することであった。

ここに立てられたテーマは、日本思想史学にかかわる人びとすべてに問いかけられているものであり、それぞれに自ら考究すべきことであろう。シンポジウムは、活発な議論がなされたので、それぞれの方々において、自らにとつての日本思想史学の意義を考究するに資するものであったと考えている。

(岡山大学名誉教授)